

第3回 運営会議 議事録

日時：平成21年10月16日

場所：大阪府庁本館東側共用会議室

出席者（敬称省略）

増田 昇（大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授）

澤木 昌典（大阪大学大学院工学研究科 教授）

下村 泰彦（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 准教授）

嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 准教授）

清野 博子（元読売新聞編集委員）

弘本 由香里（大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）客員研究員）

吉野 勝（泉佐野観光ボランティア協会）

議案1：ハード整備について

< 駐車場整備 >

- ・公園の敷地外から公園がどのように見えるのかという議論はある。しかし、見た目だけで設計を進めてもいいものなのかという疑問が残る。活動の内容とからませて形を考えていくべきである。
- ・特に棚田は活動の場として使うか使わないかが重要である。
- ・ここは府民が公園に参画してつくっていく公園である。玄関口では、ボランティアが活動しながら来園者を迎えてくれるそういう風景がふさわしいのではないかと。人の手が入っているイメージをつくっていく方がよい。エントランス部分であるということと、もともと棚田が広がっていたことを考慮すると、棚田にして活動を受け入れていくことの方が適切だと思う。
- ・今後、この公園の歴史を語り継いでいくこともボランティアの活動のひとつに成り得る。その時に過去の経緯として、もともとは棚田であってそこを新たな府民が修復しながら活動を展開していると語れることが重要ではないか。ただ、プログラムづくりや活動者のモチベーションを維持するためのしかけを今後考えていく必要がある。
- ・場所の風景も活動の内容も時間の変化に対応できるよう、いろんな可能性の余地を残しておくほうがよい。
- ・ボランティアの能力は限られている。活動を広げていくには、人数や技量が問われるため、そのあたりのバランスを見ながら進めていけたらと思う。
- ・棚田も人が活動する田んぼとして再生させるのであればよいと思うが、そうでなければ花木のほうがよい。
- ・林の駐車場の面積を広くとって、上部の棚田だけを残したり、棚田を疎林で小さくしていくことも考えられる。

委員長まとめ

- ・棚田といってもボランティアの方が水田として維持していくにはとても困難。手のかからない蓮華、菜の花、そば等、手間のかからない植物を育てる工夫が必要。また、刈り取った跡地は舞台として活用することができるだろう。そのあたりのバランスをどのように考えていくかが重要。
- ・また、遠景に見える堤の美しさを残していくことも必要である利用と景観の美しさのバランスが必要。
- ・公園に参画した人が公園を活用している風景がこの公園での売りであるため、玄関口もそれが表現で

きる方がよい。そのためには、この場所でどのくらいの活動プログラムを作っていけるのが重要な点である。

<休憩所>

- ・休憩施設は開放性のあるものと示されている。夜に開けて置くのか。枯葉や昆虫が迷い込むので、夜は閉まってもよいのかなと思う。囲われたものでもよいのではないか。
- ・汗を流せるようなシャワールームがあると便利である。シャワールームは水がでるだけで十分である。パークセンターと休憩施設の両方あってもよいのではないか。
- ・倉庫は大きくしておいたほうがよい。
- ・畳など横になれるスペースがあればよいと思う。縁側があればよいのではないか。
- ・公園計画地に住まいがあったのであれば、その住まいを復元しておくべきと考えるが、おそらく住まいは別のところであって、公園計画地には作業小屋が点在していたのではないかと感じている。そうであればしっかりした施設をつくってもイミテーションとなる。簡易な施設をつくるべきではないか。
- ・開設後はレンジャーだけでなく、一般来園者も使うような施設になると思われる。そのことも踏まえて考えていかないといけない。
- ・稼動間仕切りは写真のものではなく、昔の知恵を活かしたものにしないといけない。
- ・他にもこのような休憩施設は出てくる。統一されたデザインを模索していかなければならない。
- ・フレームだけにパネルをどうはめ込んでいくことによっていろんな形に変わるような施設でもよい。
- ・ひとつの休憩施設がカバーできる面積から、公園内にいくつの休憩所が必要なのかを検討しておかないといけない。
- ・開設後の休憩施設の使い方も想定しながら、機能を検討しないと管理区分が難しくなる。
- ・休憩施設をボランティアと一般利用者が一緒につかうとなると混乱を招くのではないか。レンジャーの活動拠点として位置づけておくほうがよいと思う。

委員長まとめ

- ・ここの施設をどのように使うかによって休憩所の機能は決まってくるのではないか。活動の前線基地とするのか、会議場所とするのか等、休憩施設の機能を考えなければならない。
- ・倉庫は必要になると思うが、倉庫が増えていくことが考えられることから簡易でもよいかもしれない。
- ・パークセンターがしっかりしたつくりこみをする施設になるので、この休憩所はフォーリーや小屋のような建物で可変性の持つものの方がよい。
- ・伝統と機能の両方のデザインを考慮しながらつくっていくべき。伝統を重視すれば土間、畳、縁側のようなものがある日本家屋のようなものなる。しかし、日本家屋は高価なものになってしまうことが懸念される。
- ・機能美の中で、使い勝手の日本の良さを考えていくような形で考えてもらいたい。
- ・施設は活動を支援することに特化したものになるだろう。
- ・可変性を持っているということが重要である。

議案2：パーククラブの組織化について

- ・1期生と2期生との連携は、行政と1期生・2期生とで話し合っ決めればよいと思う。
- ・公益性、公平性についてもケースに沿って少しずつ進めていくしかないように感じる。コミュニケーションがしやすい環境をつくっておくことが必要。
- ・パーククラブは、いずれ自立した活動行っていかなければならないので、初めの段階から自立した活

動をしていかななくてはならないことを伝えておくべき。

- ・養成講座自体もパークレンジャーが企画してやっていかななくてはならないことを伝えていく必要もある。
- ・2期生が1期生の背中を見ながら、講座を受けていただけるような機会をつくっていくべきである。2期生が活動内容を考える際には、1期生も一緒に考えるなどの工夫をしなければならないと思う。
- ・誰のものであるということは誰ものでもないということに陥りやすい。そのあたりの公共性を座学でやってもうまく受講生に伝わらないので、他の公園へ行って学ぶとかクイズ形式で行うほうがよい。
- ・1期生と2期生の交流については、アンオフィシャルの接点も増やしていかなければならない。
- ・公益性、公共性については、座学をやってもなかなか学んでいただけないことが多い。1期生の方から教えてもらうことがよい。
- ・1期生に2期生の歓迎会をやればよいのではないか。

委員長まとめ

- ・先進事例研修で、他の公園のボランティアとの交流を行う機会があってもよいだろう。そこで、行政とどのようなパートナーシップを築いてきたのかを聞いてみる方がよい。話を聞くだけではなく、現地での体験を通じて学んでもらう形がよい。
- ・利用者を受け入れる「おもてなし」について、どのように学んでもらうのが重要。初期の段階からこういうことを学んでいくことが必要である。
- ・1期生、2期生の交流については養成講座の企画してもらったり、実習の時は手伝いをしてもらうことが必要。それも大阪府からお願いするのではなく、受講生の中から機運が高まってきて、養成講座の運営に関わっていただくような形がよいと思う。
- ・1期生の人に今後2期生以降の人とも一緒に活動を行って行かななくてはならないことを理解してもらわなくてはならない。その交流のアイデアは、パークレンジャー自身に出してもらうような形がよいと思う。